



星の王子さま

上原中学校 三年三組 川越由奈

「いちばん大切なものは目に見えない。」王子さまは地球におり立つて、友達になったキツネからこのことを教えてもらった。私の中のいちばん大切なものも目に見えない。だからこの言葉が本を読んだなかでもっとも心に残っていた。王子さまはキツネと別れるときに悲しんでいるキツネを見て、

「ぼくは、きみを悲しませようなんて思ってなかったのに、君が言ったんだよ、手なずけてほしいって……。」

と言った。そう、最後は必ず悲しくなると分かっているのに私たちはそれを心の一番大切なものにしてしまう。つくづく人間は不思議な生きものだと思った。でも、私もその不思議な生きものの一人なのだ。私の一番大切なものはたくさんある。家族とか学校の友人とか……。どれか一番のものを選べと言われてたらそれは選べない。そういうものだろう。そして、私には家族などの他に大切なものがある。二人の友人だ。一人目の子をほぼ毎日のように会えていたのは一年ちよつとだけだった。もともと住んでいる場所も、年も違う子だったから、なんでこんなに仲良くいんだらうと首をかしげるくらい共通点がなかった。同じ学校というわけでもない。でも、私はその子が好きだった。王子とキツネも少しの時間でお互いの事が大切な存在になっていたから、時間とはあまり関係ないのかもしれない。そして私とその子がなかなか会えない関係にな

つてしまうその日、私はキツネのように泣いた。そのあと、その子と会ったのはもう一年も前の話だ。そして二人目の子は小学生時代の親友だ。その子とはなぜだか好きなもの、選ぶもの、考えていることなどが妙に合った。小学校を卒業してからも、たまに連絡をとったり、遊んだりしていた。ある日、その子からのメールで「名古屋に引っ越すことになった。」と送られてきた。そのとき私は思ってしまった。私がとても好きになる子はなんでみんな会いづらくなってしまっただろう、と。嫌で、でもどうすることも出来なかった。その子が名古屋へ行く前日、私はその子と会った。しみりともせず、ただいつものように自分たちの好きなものや好きなことをさんざん言い合って、また明日も会うような感じで

「バイバイ。」

と言った。名古屋なんか、すぐ行けるじゃないと言う人もいるだろう。でも私にとっては王子さまの住んでいる星と地球ぐらいはてしなく感じるので。中学生の行ける範囲はかぎりなくせまい。どんな長い時間会えなくても私の中で大切二人の存在は変わらないだろう。星の王子さまに出てきた、

「おれはまじめな男だ！」

と言い、ひたすら計算ばかりしている大人になんかなりたくない。星を見てきれいだと思い、花を見て美しいと思ひ、大切な人を忘れてしまうことのない大人になりたい。最後に、この本を私は二回読んだ。一回読んだだけではこの本を理解できなかったのだ。それと、この本はもう一度、読んでみたくなってしまふような魅力的な本だった。王子さまも

とても魅力的な人だった。一つ一つの言動は、最初は子どもっぽいなど感じるかもしれないけれども、その本当の意味、言動の奥深くは地球で生きている大人たちよりも人間の心に必要なものを教えてくれる。私は王子さまに教わったのだ。人生観が変わったと言っても過言ではないと思う。私は、これから自分の周りにあるすばらしい物たちに目を向け、素直に、

「すばらしい！」

と言いたい。それだけで、自分の人生がより楽しく、輝いてくるのではないかと思う。ずっと下を見て歩いて、ずっと机に向かっていてはつまらないだろう。ふと道の端に目をやってみたり、ふと歩いている時に空を見上げてみたり、ふと窓の外の景色を見るのもいいものだ。そんな風に生活をしていって、今の、中学生の私の気持ちを忘れない大人になつていることを期待する。王子さまとアフリカの砂漠で出会った本に出てくる男性は、六年も王子さまを待っているそうだ。本の最後に書いてある。もし、アフリカの砂漠に行つて、目の前に黄金色の髪をしている男の子がいたら、僕に手紙を書いてほしいんだ、王子さまが帰ってきたと……。私はもし、社会に出て働いている自分が困っていたら、アフリカの砂漠に行くことをまっ先におすすめるだろう。

「星の王子さまに会えるかもよ！」